

(98)

〔共同研究〕

Vāmana 著 Kāvyaḷamkārasūtravṛtti

『詩の修辭法の手引・註』第1章

— テクストならびに訳註 —

サンスクリット修辭法研究会

### はじめに

当研究会は、サンスクリット文献に見られる修辭法の解明を目指して結成され、平成19年度（2007年）より6年間にわたり大正大学総合佛教研究所の研究助成を受けて共同研究を遂行してきた。今年度の研究会参加者は以下の諸氏である（肩書は、2012年12月現在）。

米澤 嘉康（大正大学講師）

古宇田亮修（淑徳大学長谷川仏教文化研究所専任研究員、大正大学講師）

長島 潤道（大正大学講師）

倉西 憲一（大正大学総合佛教研究所研究員）

吉澤 秀知（大正大学総合佛教研究所講師、研究会代表）

西野 翠（大正大学総合佛教研究所研究員）

平林 二郎（大正大学大学院研究生）

松本 恒爾（大正大学総合佛教研究所研究生）

横山 裕明（大正大学大学院博士後期課程）

当研究会結成にあたり、研究計画として以下の3段階を策定した。

①Daṇḍin 著 Kāvyaḷarśa の読解・翻訳を通じて、修辭法の定義について確認する。

②修辭法の定義は修辭学者によって異なるので、その他の主要な学者（Bhāmaha, Vāmana, Mammaṭa 等）との意見の相違についても確認する。

③それらの修辭法が実際のサンスクリット文献において、どのように

用いられているのか検証する。

この計画に従い、当研究会では、過去5年間の当研究所年報に、Kāvyaḍarśa 全章のローマナイズテキストならびに訳註を公表してきた〔当研究会 2008～2012〕。

したがって、当研究会では、本年度より②の段階に本格的に入ることとなった。Daṇḍin 以外の主要な修辞学者のうち、Bhāmaha については、当研究会に属する古宇田によって訳註研究が順次進められているところである〔古宇田亮修 2009～2012〕。そこで、当研究会としては、本年度より Vāmana の Kāvyaḷamkārasūtra (略号 KAS.) および本人による Vṛtti (略号 KASV.) に焦点を当てて、ローマナイズテキストならびに訳註の作成を行なうこととする。Vāmana は、時代的にも内容的にも Daṇḍin の詩論に近接していると考えられるので、これを取りあげた次第である。

本年度の原稿は、古宇田、平林、吉澤が準備した下訳に対して、研究会において検討を加えたりえて、古宇田が版下にまとめたものである。

なお、〔当研究会 2011, 2012〕に掲載された研究会名「サンスクリット語修辞法研究会」は「サンスクリット修辞法研究会」の誤りである。謝して訂正を乞う。

### Vāmana の年代

〔De 1960: 78ff〕によれば、Vāmana の年代の上限は、作家 Bhavabhūti の作品 (Uttararāmacarita, Mahāvīracarita) の引用により決定されるという。Bhavabhūti は、Yaśovarman 王の庇護の元に活躍した作家であり、Yaśovarman 王の在位は、最近の研究によれば<sup>1</sup>、715 年頃から 745 年頃とされる。他方、下限は、Rājaśekhara の Kāvyaḷmīmāṃsā に引用されることにより決定される。そこでは、vāmaniyāḥ 「Vāmana の信奉者たち」の説として、Vāmana の説が引用されていることから、Rājaśekhara の活躍した時代には、既に Vāmana の学説が一定の支持者を獲得していたこと

<sup>1</sup> 〔南アジアを知る事典 1992: 747〕による。

が解る。[上村勝彦 1999b: 184] によれば, Rājaśekhara は, 9 世紀末から 10 世紀前半にかけて活躍したとされる。また, Vāmana には, Ānandavardhana (9 世紀後半) の dhvani 理論が知られていないので, Vāmana の年代は, それ以前と考えられる。その他いくつかの理由<sup>2</sup>により, Vāmana が活躍した年代は 8 世紀中葉から 9 世紀前半のいずれかと結論づけることが可能である。

### Kāvyaḷamkārasūtra の構成等

KAS. は, 5 つの章 (adhikaraṇa-), 課 (adhyāya-) にして全 12 課, スートラ (sūtra-) 数としては, 全 317 より成る。[Kane 1971: 140] によれば, この adhikaraṇa-, adhyāya- という用語は, 当時のスートラ体の用語であるが, adhikaraṇa- と adhyāya- の関係は, 一般的なスートラ体とは逆であり, Kauṭilyārthaśāstra ならびに Kāmasūtra に従っているという。

章題を, K に従って挙げれば, 以下の通りとなる。

「身体について (śārīra-)」と称する第 1 の章。

「欠陥の提示 (doṣadarśana-)」と称する第 2 の章。

「美徳の識別 (guṇavivecana-)」と称する第 3 の章。

「修辞法について (āḷamkārika-)」と称する第 4 の章。

「適用について (prāyogika-)」と称する第 5 の章。

Vāmana は, sūtra-/vṛtti-スタイルを用いて著述したインドで最初の詩論家である。その執筆意図ならびに論述は, 必ずしも全てが成功に至ったとは言えないであろう<sup>3</sup>が, その所説は一定の支持者を獲得し<sup>4</sup>, 詩論の発展に一定の功績を果したことは事実であろう<sup>5</sup>。

<sup>2</sup> [De 1960: 78-80] [Kane 1971: 146-147] 参照。

<sup>3</sup> Vāmana の過失は, [Lele 2005: 158] に指摘されている。

<sup>4</sup> Kāvyaḷamkārasūtra 参照。

<sup>5</sup> [Lele 2005: 159-160] は, Vāmana の果した 11 の功績を列挙した後, 以下のよう  
に結論づけている: Vā(mana) has thus provided the readers in general and would-be  
poets in particular with enough food for thought by throwing up a number of new ideas  
and literary concepts.

## テキストと翻訳について

テキストの底本には、K (=Kāvyaṃālā 15)を用い、K に挙げられる異読 (Ka, Kha, Ga) ならびに、B の読みを校合した。Jhā の Text は、恣意的な印象が否めないのので、ほとんど参考にはなかつた。なお、複註に当たる Kāmadhenu (Gopendratippabhūpāla 著) については、B を参照した。

daṇḍa については、ほぼ、K を踏襲した。厳密には、和訳と区切りが異なるケースもあるが、Pandit の読みを記載する意味で、K の表記を変更しなかつたケースがあることを御諒解いただければ幸いである。なお、sūtra 内の daṇḍa は、カンマに変更した。

翻訳における凡例は以下の通りである。

- ① 意味の説明は、( ) 内に記した。
- ② 翻訳上の補足は、□ 内に記した。
- ③ śleṣa-「掛詞」のもう一方の意味ならびに upacāra-「間接表現」の指し示す意味は、《 》内に記した。

## 〈略号 (Abbreviations)〉

add.	addit (追加する)
B	Kāvyaḷaṃkārasūtravṛtti: <i>Kavyalankarasutra Vritti with the Commentary Kamadhenu</i> , Edited by J. K. Balasubrahmanyam, (Sri Vani Vilas Sastra Series No. 5), Srirangam, 1909.
Ga	(Cited in K): <i>Draviḍavireśvaraśāstribhir vārāṇasītaḥ prahitam. tat tu nātisuddham antimādhyāyasya trayastriṃśanmitasūtraparyantam evāsti.</i> p. 61.
Jhā	<i>Kāvyaḷaṃkāra Sūtra of Āchārya Vāmana with Kāvyaḷaṃkāra Kāmadhenu Sanskrit Commentary of Śrī Gopendra Tripurahara Bhūpāla</i> , edited with Hindi Translation by Dr. Bechana Jhā, (Kashi Sanskrit Series 209), 1972 <sup>2</sup> ; 2001 <sup>6</sup> .
K	<i>The Kāvyaḷaṃkāra-sūtras of Vāmana with his own Vṛtti (Kāvyaṃālā 15)</i> , Edited by Mahāmahopādhyāya Paṇḍit Durgāprasāda and Kāśīnath

Pāṇḍurag Parab, Revised by Vāsudev Laxmaṅ Śāstrī Paṇaśīkar. Third Revised Edition, Bombay, 1926.

KAS. Kāvyaḷaṃkārasūtra

KASV. Kāvyaḷaṃkārasūtravṛtti

Ka (Cited in K): Jayapurarājagurubhaṭṭaśrīlakṣmīdattasūnubhaṭṭaśrī-dattānāṃ pustakam. prāyaḥ śuddham. p. 40.

Kha (Cited in K): Kalkattāmudritam(= Published in Calcutta).

om. omittit (省略する)

### 〈一次資料〉

Abhijñānaśākuntalam *The Abhijñānaśākuntalam of Kālidāsa*, Edited by M. R. Kale, Delhi, 1969<sup>10</sup>.

Amarakośa *Nāmaḷiṅgānuśāsana alias Amarakośa of Amarasimha with the Commentary Vyākhyāsudhā or Rāmāśramī of Bhānuji Dīkṣita*. Edited by Mahāmahopādhyāya Paṇḍit Śivadatta Dādhimatha, Bombay, 1915.

Amaruśataka *The Amaruśataka of Amaruka. With the Commentary of Arjunavarma-deva*, Edited by Mahāmahopādhyāya Paṇḍit Durgāprasāda and Vāsudev Laxmaṅ Śāstrī Paṇaśīkar. Third Revised Edition, Bombay, 1916.

Kāvyaṃmāṃsā *Kāvyaṃmāṃsā of Rājaśekhara*, (Gaekwad's Oriental Series vol. no. 1), Edited by C. D. Dalal and Pandit R. A. Sastry, Revised and enlarged by K. S. Ramaswami Sastri Siromani, Third edition, Baroda, 1934.

Kāvyaḍarśa → [当研究会 2008～] の参考文献を参照のこと。

Kāvyaḷaṃkāra → [Naganatha 1927]

Kauṭīlyārthaśāstra → [Kangle 1969]

Mahāvīracarita *The Mahāvīracarita of Bhavabhūti with the Commentary of Vīrarāghava*, Edited by T. R. Ratnam Aiyar, S. Rangachariar, Kaśināth Pāndurang Parab, Bombay, 1892.

Medinīkośa *Nānārthaśabdakośa or Medinī Kośa of Śrī Medinīkara*, Edited by Sāhityā- cārya Pt. Jagannāth Śāstrī Hośiṅg, (The Kashi Sankrit Series 41), Varanasi, 1968.

Vaijayantīkośa *Vaijayantīkośa of Śrī Yādavaprakāśacārya*, Edited by Śrī Pt. Hara-govinda Śāstrī, Varanasi, 1971.

Harṣacarita → [Kane 1918]

〈二次資料等〉

- [De 1960] Sushil Kumar De: *History of Sanskrit Poetics*, 2vols, 2nd ed. (Repr. Calcutta, 1988).
- [Hattori 2003] Mari Hattori: On Genre and the Lyrical Tendency in the History of Sanskrit Poetics, *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies* 『南アジア研究』, No. 15.
- [Hattori 2004] Mari Hattori: Vāmana on Semantic Qualities: An Annotated Translation of the Kāvyaḷaṅkārasūtravṛtti (3. 2. 1-5. 10-14), *Three Mountains and Seven Rivers: Prof. Musashi Tachikawa's Felicitation Volume*, Edited by Shoun Hino and Toshihiro Wada, Delhi.
- [Jha 1917] Ganganath Jha: *The Kāvyaḷaṅkāra-Sūtras of Vāmana*, Translated into English, Allahabad, 1917 (2nd ed. Delhi, 1990).
- [Kane 1918] P. V. Kane: *The Harṣacarita of Bāṇabhaṭṭa (Text of Uchchhvāsas I-VIII)*, Bombay.
- [Kane 1971] P. V. Kane: *History of Sanskrit Poetics*, 4th ed., Delhi. (Repr. 1994).
- [Kangle 1969] R. P. Kangle: *The Kauṭīlīya Arthaśāstra*, 3vols, 2nd ed, Bombay.
- [Lele 2005] W. K. Lele: *A Critical Study of Vāmana's Kāvyaḷaṅkārasūtrāṇi*, Varanasi.
- [Naganatha 1927] P. V. Naganatha Sastry: *Kāvyaḷaṅkāra of Bhāmaha, edited with English Translation and Notes*, Delhi.
- [Ramanathan 2008] N. Ramanathan: Viśākhila's Work on Music: An Attempt at Reconstruction, In (<http://www.musicresearch.in>).
- [上村勝彦 1984] 『カウティリヤ実利論：古代インドの帝王学』（上・下），岩波書店。
- [上村勝彦 1999a] 『インド古典詩論研究：アーナンダヴァルダナの dhvani 理論』東京大学東洋文化研究所。
- [上村勝彦 1999b] 「ラージャシェーカラ作 Kāvyaḷaṅkārasūtra 訳注（第1章～第3章）」『東京大学東洋文化研究所紀要』第137冊，東京大学東洋文化研究所。
- [上村勝彦 2000a] 「ラージャシェーカラと rīti」『アビダルマ仏教とインド思想：

加藤純章博士還暦記念論集』春秋社.

- [上村勝彦 2000b]「ラージャシェーカラ作 Kāvyaṃimāṃsā 訳注 (第4章～第6章)」第140冊, 東京大学東洋文化研究所.
- [古宇田亮修 2003]「Abhisamācārika-Dharma における諸問題」『印度学佛教学研究』52(1).
- [古宇田亮修 2009]「Bhāmaha 著 Kāvyaālaṃkāra 『詩の修辭法』第3章: テクストならびに訳註」『長谷川仏教文化研究所年報』第33号.
- [古宇田亮修 2010]「Bhāmaha 著 Kāvyaālaṃkāra 『詩の修辭法』第1～2章: テクストならびに訳註」『長谷川仏教文化研究所年報』第34号.
- [古宇田亮修 2011]「Bhāmaha 著 Kāvyaālaṃkāra 『詩の修辭法』第4章: テクストならびに訳註」『長谷川仏教文化研究所年報』第35号.
- [古宇田亮修 2012]「Bhāmaha 著 Kāvyaālaṃkāra 『詩の修辭法』第5章: テクストならびに訳註」『長谷川仏教文化研究所年報』第36号.
- [デーヴァ 1994] B・C・デーヴァ著, 中川博志訳『インド音楽序説 (An Introduction to Indian Music)』東方出版.
- [当研究会 2008] サンスクリット修辭法研究会「Daṇḍin 著 Kāvyaḍarśa 『詩の鏡』第1章: テクストならびに訳註」『大正大学綜合佛教研究所年報』第30号.
- [当研究会 2009] サンスクリット修辭法研究会「Daṇḍin 著 Kāvyaḍarśa 『詩の鏡』第2章(上): テクストならびに訳註」『大正大学綜合佛教研究所年報』第31号.
- [当研究会 2010] サンスクリット修辭法研究会「Daṇḍin 著 Kāvyaḍarśa 『詩の鏡』第2章(下): テクストならびに訳註」『大正大学綜合佛教研究所年報』第32号.
- [当研究会 2011] サンスクリット修辭法研究会「Daṇḍin 著 Kāvyaḍarśa 『詩の鏡』第3章(上): テクストならびに訳註」『大正大学綜合佛教研究所年報』第33号.
- [当研究会 2012] サンスクリット修辭法研究会「Daṇḍin 著 Kāvyaḍarśa 『詩の鏡』第3章(下): テクストならびに訳註」『大正大学綜合佛教研究所年報』第34号.
- [服部真理 2001]「ヴァーマナの「意味のもつ美質」(arthaguṇa-)」『インド思想史研究』13.
- [南アジアを知る事典 1992] 辛島昇他監修『南アジアを知る事典』平凡社.

paṇḍitavaraśrīvāmanaviracitāni

Kāvyaḷaṃkārasūtrāṇi /

vṛttisametāni /

śārīraṃ nāma prathamam adhikaraṇam /

prathamam adhyāyaḥ /

<sup>1</sup>praṇāmya paramaṃ<sup>1</sup> jyotir vāmanena kavipriyā /

kāvyaḷaṃkārasūtrāṇāṃ sveṣāṃ<sup>2</sup> vṛttir vidhīyate //

[1. paramātmānaṃ Ka. 2. teṣāṃ Ka.]

kāvyaṃ grāhyam alaṃkāṛāt // 1.1.1 //

kāvyaṃ khalu grāhyam upādeyaṃ bhavati / alaṃkāṛāt / kāvyāśabdo 'yaṃ  
guṇālaṃkārasaṃskṛtayoḥ śabdārthayor vartate / bhaktyā<sup>1</sup> tu śabdārthamātra-  
vacano 'tra gṛhyate /

[1. śaktyā Kha.]

ko 'sāv alaṃkāra ity ata āha —

saundaryam alaṃkāraḥ // 1.1.2 //

alaṃkṛtir alaṃkāraḥ / karaṇavyutpattiyā punar alaṃkāraśabdo 'yam upamādiṣu  
vartate /

sa doṣaguṇālaṃkārahānādānābhyām // 1.1.3 //

sa khalv alaṃkāro doṣahānāt, guṇālaṃkāradānāc ca saṃpādyah kaveḥ<sup>1</sup> /

[1. om. Kha.]

śāstratas te<sup>1</sup> // 1.1.4 //

te<sup>2</sup> doṣaguṇālaṃkārahānādāne śāstrād asmāt / śāstrato hi<sup>3</sup> jñātvā doṣāñ jahyāt,  
guṇālaṃkāraṃś cādādīta / [1. add. ca Kha. 2. add. caite Kha. 3. om. Ka.]

kiṃ punaḥ phalam alaṃkāravatā kāvyena yenaita<sup>1</sup> artho 'yam<sup>2</sup> ity<sup>3</sup> āha —

kāvyaṃ sad dṛṣṭādrṣṭārtham, prītikīrtihetutvāt // 1.1.5 //

kāvyaṃ sat cāru dṛṣṭaprayojanaṃ / prītihetutvāt / adṛṣṭaprayojanaṃ / kīrtihetu-  
tvāt / atra ślokāḥ<sup>4</sup> —

pratiṣṭhāṃ kāvyabandhasya yaśasaḥ saraṇiṃ viduḥ /

akīrtivartanīṃ tv evaṃ<sup>5</sup> kukavitvaviḍambanām //

(106)

kīrtiṃ svargaphalām āhur āsaṃsāraṃ vipaścitaḥ /  
akīrtiṃ tu<sup>6</sup> nirālokanarakoddeśadūtikām //  
tasmāt kīrtim upādātum akīrtiṃ tu<sup>7</sup> nibarhitum<sup>8</sup> /  
kāvyālaṃkāraśāstrārthaḥ prasādyāḥ kavipuṃgavaiḥ //

[1. yena tad Ka. 2. add. yatna B. 3. add. ata BKa. 4. ślokaḥ Ka. 5. eva Ka. 6. ca Kha.  
7. ca BKha. 8. vyapohitum Kha.]

iti kāvyālaṃkārasūtravṛttau śārīre prathame 'dhikaraṇe prathamō 'dhyāyaḥ /  
prayojanasthāpanā<sup>1</sup> / [1. om. B.]

---

dviṭīyo 'dhyāyaḥ

<sup>1</sup> adhikārinirūpaṇārtham<sup>2</sup> āha —

arocakinaḥ satṛṇābhyavahāriṇaś ca kavayaḥ<sup>3</sup> // 1.2.1 //

iha khalu dvaye kavayaḥ sambhavanti — arocakinaḥ, satṛṇābhyavahāriṇaś ceti  
/ arocakisatṛṇābhyavahāriśabdau<sup>4</sup> gauṇārthau / ko 'sāv arthaḥ — vivekitvam  
avivekitvaṃ ceti / [1. add. prayojanasthāpanā / B. 2. prayojanasthāpanādhikāri° Kha.

3. om. Ka. 4. °bhyavahāriṇau Kha.]

tad<sup>1</sup> āha —

pūrve śiṣyāḥ, vivekitvāt // 1.2.2 //

pūrve khalv arocakinaḥ śiṣyāḥ śāsanīyāḥ / vivekitvād vivecanaśīlatvāt /

[1. yad BKa.]

netare, tadviparyayāt // 1.2.3 //

itare satṛṇābhyavahāriṇo na śiṣyāḥ / tadviparyayād avivecanaśīlatvāt / na ca  
śīlam apākartuṃ śakyam /

nanv evaṃ na śāstraṃ sarvānuḡrāhi / <sup>1</sup>kutas tad upādīyate<sup>1</sup> / tad āha —

na śāstram adravyeṣv arthavat // 1.2.4 //

na khalu śāstram adravyeṣv avivekiṣv arthavat /

[1. syāt ko vā manyate BKa.]

nidarśanam āha —

na katakaṃ paṅkaprasādanāya // 1.2.5 //

na hi katakaṃ payasa iva pañkprasādanāya<sup>1</sup> prabhavati<sup>2</sup> /

[1. pañkasya prasādanāya B. 2. bhavatīti Ka.]

adhikāriṇo nirūpya rītiviniścayārtham<sup>1</sup> āha —

rītir ātmā kāvyasya // 1.2.6 //

rītir nāmeyam ātmā kāvyasya / śarīrasyeveti vākyaśeṣaḥ /

[1. rītiviniścayārtham Kha.]

kā<sup>1</sup> punar iyam rītir ity āha<sup>2</sup> —

viśiṣṭā padaracanā<sup>3</sup> rītiḥ // 1.2.7 //

viśeṣavati padānām racanā rītiḥ /

[1. kiṃ B. 2. atrāha B. 3. viśiṣṭapadaracanā Ka.]

ko 'sau viśeṣa ity<sup>1</sup> āha —

viśeṣo guṇātmā // 1.2.8 //

vakṣyamāṇaguṇarūpo viśeṣaḥ /

[1. add. ata B.]

sā tridhā<sup>1</sup> —<sup>2</sup>vaidarbhī gauḍīyā pāñcālī ceti<sup>2</sup> // 1.2.9 //

sā ceyam rītis tridhā bhidyate — vaidarbhī gauḍīyā pāñcālī ceti /

[1. tredhā B. 2. om. Kha.]

kiṃ punar deśavaśād<sup>1</sup> dravyavad guṇotpattiḥ kāvyānām, yenāyam deśa-  
viśeṣavyapadeśaḥ / naivam<sup>2</sup> / yad āha —

vidarbhādiṣu drṣṭatvāt tatsamākhyā // 1.2.10 //

vidarbhagauḍapāñcāleṣu deśeṣu<sup>3</sup> tatratiyāiḥ kavibhir yathāsvarūpam  
upalabdhatvāt tatsamākhyā<sup>4</sup> / na punar deśaiḥ kiṃcid upakriyate kāvyānām /

[1. deśaviśeṣe Kha. 2. naiva Kha. 3. om. Ka. 4. deśasamākhyā BKa.]

tāsām guṇabhedād bhedom āha —

samagraguṇā<sup>1</sup> vaidarbhī // 1.2.11 //

samagrair ojaḥprasādaprabhṛtir guṇair upetā vaidarbhī nāma rītiḥ /

<sup>2</sup>atra ślokau<sup>2</sup> —

asprṣṭā doṣamātrābhiḥ samagraguṇagumphitā /

vipañcīsvarasubhāgyā vaidarbhī rītir iṣyate //

(108)

<sup>3</sup>tām ekām evaṃ kavayaḥ stuvanti<sup>3</sup> —

sati vaktari saty arthe sati śabdānuśāsane /

asti tan na vinā yena parisravati vāṅmadhu //<sup>4</sup>

atrodāharaṇam (śākuntalam 2. 6) —

*gāhantāṃ mahiṣā nipānasalilam śṛṅgair muhus tāditaṃ*

*chāyābaddhakadambakaṃ mṛgakulaṃ romantham abhyasyatu /*

*visrabdhaiḥ kriyatāṃ varāhatibhir mustākṣatiḥ palvale*

*viśrāntiṃ labhatām idaṃ ca śīthilajyābandham asmaddhanuḥ //*

[1. samagraḡuṇopetā B. 2. om. Ka; atra ślokaḥ B. 3. alamkārādisaubhāgyāṃ tām ekām eva stuvanti kavayaḥ Kha. 4. Cited in Kāvyaṃimāṃsā Ch. 5 (p.20): sati vaktari saty arthe sati śabde sati rase satī, ...]

ojaḥkāntimatī gauḍīyā // 1.2.12 //

ojaḥ kāntīś ca <sup>1</sup>vidyete yasyāṃ sā<sup>1</sup> ojaḥkāntimatī gauḍīyā nāma rītiḥ /  
mādhuryasaukumāryayor abhāvāt samāsabahulā atyulbaṇapadā ca /  
atra ślokaḥ —

samastātyutkaṭapadām<sup>2</sup> ojaḥkāntiguṇānvitām<sup>3</sup> /

gauḍīyām iti gāyanti rītiṃ rītivicakṣaṇāḥ //

udāharaṇam — (Mahāvīracarita 1. 54)

*doraṇḍāñcitacandraśekharaḍhanurdaṇḍāvabhaṅgodyata-*

*ṣṭaṅkāradhvanirāryabālacaritapraṣṭāvanāḍiṇḍimaḥ /*

*drākṣaryasta<sup>4</sup>-kapālasaṃpuṭamilabrahmaṇḍabhāṇḍodara-*

*bhrāmyatpiṇḍitacaṇḍimā katham aho nādyāpi viśrāmyati //*

[1. vidyate yasyāḥ seyaṃ Ka. 2. samastātyudbhaṭapadām BKa. 3. °guṇāṅkitām Ka.

4. drākṣaryāpta- Ka.]

mādhuryasaukumāryopapannā pāñcālī // 1.2.13 //

mādhruyeṇa saukumāryeṇa ca guṇenopapannā pāñcālī nāma rītiḥ / ojaḥkānty-  
abhāvād <sup>1</sup>anulbaṇapadā vicchāyā<sup>1</sup> ca /

<sup>2</sup>tathā ca ślokaḥ<sup>2</sup> —

āśliṣṭaślathabhāvāṃ tu purāṇacchāyayāśritām<sup>3</sup> /

madhurām sukumārām<sup>4</sup> ca pāñcālīm kavayo viduḥ //  
atrodāharaṇam<sup>5</sup> —

*grāme 'smiṇ pathikāya pāntha vasatir naivādhunā dīyate*  
*rātrāv atra vihāra<sup>6</sup>-maṇḍapatale pānthaḥ prasupto yuvā /*  
*tenothāya khalena garjati ghane smṛtvā priyām tat kṛtaṃ*  
*yenādyāpi karaṅkadanḍapatanāśaṅkī janas tiṣṭhati //*

[1. anulbaṇaślathavicchāyā Ka. 2. om. Ka. 3. °ānvitām B. 4. sukumārīm Kha.  
5. athodāharaṇam Ka. 6. vivāha° Ka.]

etāsu tiṣṣu rītiṣu rekhāsv iva citraṃ kāvyam pratiṣṭhitam iti /  
tāsām pūrvā grāhyā, guṇasākalyāt // 1.2.14 //

tāsām tiṣṇām rītīnām pūrvā vaidarbhī grāhyā / guṇānām sākalyāt /  
na punar itare, stokaguṇatvāt // 1.2.15 //

itare gauḍīyapāñcālyau na grāhye / stokaguṇatvāt /  
tadārohaṇārtham itarābhyāsa ity eke // 1.2.16 //

tasyā vaidarbhyā evārohaṇārtham itarayor api rītyor abhyāsa ity eke manyante/  
<sup>1</sup>tat tu na, <sup>1</sup>atattvaśīlasya tattvāniṣpatteḥ // 1.2.17 //

na hy atattvaṃ śīlayatas tattvaṃ niṣpadyate / [1. tan na Ka; tac ca na B.]  
nidarśanārtham āha —

na śaṇa<sup>1</sup>-sūtravānābhyāse trasarasūtravāna<sup>2</sup>-vaicitryalābhah // 1.2.18 //  
na hi śaṇa<sup>1</sup>-sūtravānam abhyasyan kuvindas trasarasūtra<sup>3</sup>-vānavaicitryam<sup>4</sup>

labhate / [1. śaṇa° Ka. 2. vāne Kha. 3. trasaratantu- BKa. 4. °vaicitrīm Kha.]

sāpi samāsābhāve śuddhavidarbhī // 1.2.19 //

sāpi vaidarbhī rītiḥ śuddhavidarbhī bhāṇyate / yadi samāsavatpadaṃ<sup>1</sup> na  
bhavati / [1. samāsavartipadaṃ Ka.]

tasyām arthaguṇasaṃpad āśvādyā // 1.2.20 //

tasyām vaidarbhyām arthaguṇasaṃpad āśvādyā bhavati //

tadupārohād arthaguṇaleśo 'pi // 1.2.21 //

tadupadhānataḥ khalv arthaguṇaleśo 'pi svadate / kim aṅga, punar arthaguṇa-  
saṃpat / tathā cāhuḥ —

kiṃ tv asti kācid aparaiṃ padānupūrvī  
 yasyāṃ na kiñcid api kiñcid ivāvabhāti /  
 1. ānandayaty atha ca kaṇṇapatham prayātā  
 cetaḥ satām amṛtavṛṣṭir iva praviṣṭā //<sup>1</sup>  
 vacasi yam adhigamya<sup>2</sup> spandate<sup>3</sup> vācakaśrīr  
 vitatham<sup>4</sup> api tathātvaṃ<sup>4</sup> yatra vastu prayāti /  
 udayati hi sa tādrk kvāpi vaidarbharītau  
 saḥṛdayaḥṛdayānām rañjakaḥ ko 'pi pākaḥ //

[1. om. B. 2. adhiśayya B. 3. syandate B. 4. avitathatvaṃ B; api yathātvaṃ Ka.]

sāpi<sup>1</sup> vaidarbhī, tātsthyāt // 1.2.22 //

sāpīyam arthaguṇasaṃpad<sup>2</sup> vaidarbhīty uktā<sup>2</sup> / tātsthyād ity upacārato  
 vyavahāraṃ darśayati /

[1. sāpīyaṃ Kha. 2. vaidarbhīty ucyate B; vaidarbhī uktā Kha.]

iti kāvyālaṃkārasūtravṛtttau śārīre prathame 'dhikaraṇe dvitīyo 'dhyāyaḥ /  
 1. adhikāricintā rītinīścayaś ca<sup>1</sup> / [1. om. BKha.]

tṛtīyo 'dhyāyaḥ /

rītitattvaṃ<sup>1</sup> nirūpya kāvyāṅgāny upadarśayitum āha —  
 loko vidyā prakīrṇaṃ ca kāvyāṅgāni // 1.3.1 //

[1. adhikāravattāṃ rītinīścayaś ca Kha; adhikāricintāṃ rītitattvaṃ ca B.]

uddeśakrameṇaitad<sup>1</sup> vyācāṣṭe —

lokavṛttam lokaḥ // 1.3.2 //

lokaḥ sthāvarajaṅgamātmā tasya vartanaṃ vṛttam iti /

[1. uddeśakrameṇaivaitad Kha.]

śabdasmṛtyabhidhānaśoḥ<sup>1</sup> cchandovicitikalākāmaśāstradaṇḍanīti-  
 pūrvā vidyā<sup>2</sup> // 1.3.3 //

śabdasmṛtyādīnām tatpūrvakatvaṃ<sup>3</sup> pūrvam kāvyabandheṣv apekṣaṇīyatvāt /

[1. °kośa- B. 2. vidyāḥ Ka. 3. tatpūrvatvaṃ B.]

tāsām kāvyāṅgatvaṃ yojayitum āha —

śabdasmṛteḥ śabdaśuddhiḥ // 1.3.4 //

śabdasmṛter vyākaraṇāc chabdānām śuddhiḥ sādhutvaniścayaḥ<sup>1</sup> kartavyaḥ<sup>2</sup> /  
śuddhāni hi padāni niḥśaṅkaiḥ<sup>3</sup> kavibhiḥ prayujyante /

[1. sādhutve niścayaḥ Ka. 2. om. Ka. 3. niḥkampaiḥ BKa.]

abhidhānaśataḥ<sup>1</sup> padārthaniścayaḥ // 1.3.5 //

padaṃ hi racanāpraveśayogyam<sup>2</sup> bhāvayan saṃdigdhārthatvena na gṛhṇīyān na  
vā jahyād iti kāvyabandhavighnaḥ / tasmād abhidhānaśataḥ padārtha-  
niścayaḥ kartavya iti<sup>3</sup> / apūrvābhidhānalābhārthatvaṃ tv ayuktam abhidhāna-  
kośasya / aprayuktasyāprayojyavāt / yadi prayuktaṃ prayujyate tarhi kim iti  
saṃdigdhāthatvam āśaṅkitaṃ padasya / tan na / tatra sāmānyenārthāvagatiḥ<sup>4</sup>  
saṃbhavati / yathā nīvīśabdena jaghanavastragranthir ucyaṭa iti kasyacin  
niścayaḥ / striyā vā puruṣasya veti saṃśayaḥ <sup>5</sup>“nīvī saṃgrathanam”<sup>5</sup> nāryā  
jaghanasthasya vāsasaḥ<sup>6</sup> iti nāmamālāpratīkam apaśyata iti / atha katham —

*kenacit pūrvamukto pi nīvībandhaḥ ślathikṛtaḥ /*

*vicitrabhojanābhogavardhamānaḥdarāsthībhiḥ<sup>6</sup> //*

iti prayogaḥ / bhrānter upacārād<sup>7</sup> vā /

[1. kośāt BKa. 2. racanāprayogyapraveśaṃ Ka. 3. om. BKha. 4. sāmānyenāpy  
arthāvagatiḥ Ka. 5. nīvīr āgrathanam Kha. 6. The order of ab and cd pāda reversed.  
BJhā. 7. upamānād Ka.]

chandoviciter vṛttasaṃśayacchedaḥ // 1.3.6 //

kāvyaābhyāsād vṛttasaṃkrāntir bhavaty eva / kiṃ tu mātrāvṛttādiṣu kvacit  
saṃśayaḥ syāt / ato vṛttasaṃśayacchedaś chandoviciter<sup>1</sup> vidheya iti<sup>2</sup> /

[1. chandaḥśāstrataḥ BKa. 2. om. Kha.]

kalāśāstrebyaḥ<sup>1</sup> kalātattvasya saṃvit<sup>1</sup> // 1.3.7 //

kalā gītanṛtyacitrādīkāś tāsām abhidhāyakāni śāstrāṇi viśākḥilādīpraṇīṭāni  
kalāśāstrāṇi tebyaḥ kalātattvasya saṃvit saṃvedanam / na hi kalātattvān-  
upalabdhou kalāvastu samyañnibaddhum<sup>2</sup> śakyam iti /

[1. kalātattvasaṃvit Ka. 2. samyañnibandhum B]

kāmaśāstrataḥ kāmopacārasya // 1.3.8 //

(112)

saṃvid ity anuvartate<sup>1</sup> / kāmopacārasya saṃvit kāmaśāstrata iti / kāmopacāra-  
bahulaṃ hi vastu<sup>2</sup> kāvyasyeti / [1. tasyānuvartate Ka. 2. om. Ka.]

daṇḍanīter nayāpanayayoḥ // 1.3.9 //

daṇḍanīter arthaśāstrān nayasyāpanayasya ca saṃvid<sup>1</sup> iti / tatra śāḍguṇyasya  
yathāvat prayogo nayaḥ / tadviparīto 'panayaḥ / na hi tāv aviññāya nāyaka-  
pratināyakayor vṛttaṃ śakyam kāvye nibaddhum<sup>2</sup> iti /

[1. saṃvijñānaṃ Kha. 2. nibandhum B.]

itivṛttakuṭilatvaṃ ca tataḥ<sup>1</sup> // 1.3.10 //

itihāsādir itivṛttaṃ kāvyasārīram<sup>2</sup> / tasya kuṭilatvaṃ tato daṇḍanīter  
<sup>3</sup>balīyastvābalīyasādiprayogo vyutpattimūlatvāt<sup>3</sup> tasyāḥ / evam anyāsām api  
vidyānām yathāsvam<sup>4</sup> upayogo varṇanīya iti /

[1. add. itihāsādi Ka. 2. kāvyārthaḥ Kha. 3. ābalīyasādiprayogavyutpattimūlatvāt BKa.

4. yathāyathaṃ Kha.]

lakṣyajñatvaṃ abhiyogo vṛddhasevāvekṣaṇaṃ pratibhānam avadhā-  
naṃ ca prakīrṇam // 1.3.11 //

tatra kāvyaparcayo lakṣyajñatvaṃ // 1.3.12 //

anyeśāṃ<sup>1</sup> kāvyeṣu paricayo lakṣyajñatvaṃ / tato hi kāvyabandhasya vyutpattir  
bhavati / [1. anyeṣu Ka.]

kāvyabandhodyamo 'bhiyogaḥ // 1.3.13 //

<sup>1</sup> kāvyasya bandhanaṃ<sup>2</sup> <sup>3</sup>racanā kāvyabandhaḥ<sup>3</sup> / tatrodyamo 'bhiyogaḥ / sa  
hi<sup>4</sup> kavivaprakarṣam avasamdhadhātī<sup>5</sup> / [1. add. bandhanaṃ bandhaḥ B. 2. bandho  
B. 3. om. Kha. 4. om. Ka. 5. ārādhayati Ka.]

kāvyopadeśaguruśūsrūṣaṇaṃ<sup>1</sup> vṛddhasevā // 1.3.14 //

kāvyopadeśe gurava upadeṣṭāraḥ<sup>2</sup> / teṣāṃ śūsrūṣaṇaṃ vṛddhasevā / tataḥ  
<sup>3</sup>kāvyavidyāyāḥ saṃkrāntir bhavati<sup>3</sup> /

[1. Ka. adds ca. 2. om. Ka. 3. kāvyacchāyā saṃkrāmati Ka.]

padādhānoddharaṇam avekṣaṇam<sup>1</sup> // 1.3.15 //

padasyādhānaṃ nyāsaḥ / uddharaṇam apasāraṇam<sup>2</sup> / tayoh<sup>3</sup> khalv avekṣaṇam /  
atra ślokaḥ —

ādhānoddharaṇe<sup>4</sup> tāvad yāvad dolāyate manaḥ /  
padasya sthāpīte<sup>5</sup> sthairyē hanta siddhā sarasvatī //  
yat padāni tyajanty eva parivṛttisahiṣṇutām /  
taṃ śabdanyāsanīṣṇātāḥ śabdapākam pracakṣate<sup>6</sup> //

[1. padādhānoddharaṇe cāvekṣaṇam Kha. 2. apasāraḥ Ka. 3. tat Ka. 4. āvāpod-  
dharmaṇe Kāvya-mīmāṃsā Ch. 5(p.20) 5. °sthāpīte Kha. 6. Cited in Kāvya-  
mīmāṃsā Ch. 5(p.20)]

kavitvabījaṃ pratibhānam // 1.3.16 //

kavitvasya bījaṃ kavitvabījaṃ janmāntarāgata<sup>1</sup>-saṃskāraviśeṣaḥ kaścit /  
yasmād bījaṃ<sup>2</sup> vinā kāvyam na niṣpadyate / niṣpannam vāvahāsāyatanam<sup>3</sup>  
syāt/ [1. om. Ka. 2. om. BKha. 3. ca hāsāyatanam Ka.]

cittaikāgryam avadhānam // 1.3.17 //

<sup>1</sup>-cittasyaikāgryam bāhyārthanivṛttiḥ<sup>1</sup> / tad avadhānam / avahitam hi cittam  
arthān paśyati<sup>2</sup> / [1. cittaikāgryam anyārthavinivṛttiḥ Kha. 2. na patati Ka.]

tad deśakālābhyām // 1.3.18 //

tad avadhānam <sup>1</sup>-deśāt kālāc ca samutpadyate<sup>1</sup> /

[1. deśakālābhyām sampadyate Ka.]

kau punar deśakālāv ity atrāha —

vivikto deśaḥ // 1.3.19 //

vivikto nirjanaḥ /

rātriyāmas turīyaḥ kālāḥ // 1.3.20 //

rātrer yāmo rātriyāmaḥ praharaḥ / turīyaś caturthaḥ kāla<sup>1</sup> iti / tadvasād  
viṣayoparataṃ<sup>2</sup> prasannam cittam<sup>3</sup> avadhatte /

[1. om. Kha. 2. viṣayād uparataṃ Ka. 3. cittam prasannam B.]

evam kāvyāṅgāny upadarśya <sup>1</sup>-kāvyaviśeṣakathanārtham<sup>1</sup> āha —

kāvyaṃ gadyaṃ padyaṃ ca // 1.3.21 //

gadyasya <sup>2</sup>-pūrvam nirdeśo durlakṣyaviṣayatvena durbandhatvāt<sup>2</sup> / yathāhuḥ<sup>3</sup>  
— gadyaṃ kavīnām nikaṣaṃ vadantīti /

[1. kāvyaviśeṣajñānārtham B; kāvyaviśeṣasyajñānārtham Kha. 2. pūrvanirdeśo

durbandhatvāt viṣayatvena durbodhatvāt Kha. 3. tathāhuḥ B.]

tac ca tridhā bhinnam iti darśayitum āha —

gadyaṃ vṛttagandhi cūrṇam utkalikāprāyam ca // 1.3.22 //

tallakṣaṇāny āha —

padyabhāgavad vṛttagandhi // 1.3.23 //

padyasya bhāgāḥ padyabhāgās tadvad vṛttagandhi /

yathā — “*pātālatālutalavāsiṣu dānaveṣu*” iti /

atra hi vasantatilakākhyasya vṛttasya bhāgāḥ pratyabhijñāyate /

anāviddhalalitapadaṃ cūrṇam // 1.3.24 //

anāviddhāny adīrghasamāsāni lalitāny anuddhatāni padāni yasmims tad

anāviddhalalitapadaṃ cūrṇam iti / yathā —

*abhyāso hi karmaṇām kauśalam āvahati /*

*na hi sakṛnnipāta<sup>1</sup>-mātreṇodabindur api grāvaṇi nimnatām ādadhāti /*

[1. sakṛnnipatita° Ka.]

viparītam utkalikāprāyam // 1.3.25 //

viparītam āviddhotapadam utkalilāprāyam / yathā —

*kuliśāsikharakharanakharapracayapracāṇḍapeṭāpāṭitamattamātaṅgakumbha-  
sthalagalanmadacchaṭācchuritacārukesara-bhāra<sup>1</sup>-bhāsuramukhe kesariṇṭi /*

[1. om. Ka.]

padyam anekabhedam // 1.3.26 //

padyaṃ khalv anekena samārdhasamaviṣamādinā <sup>1</sup>bhedena bhinnam

bhavati<sup>1</sup>/ [1. bhedenopetam bhavati B; bhedenopetam iti Ka.]

tad anibaddham nibaddham ca // 1.3.27 //

tad idaṃ gadyapadyarūpaṃ kāvyam anibaddham nibaddham ca / anayoḥ  
prasiddhatvāl lakṣaṇam noktam /

kramasiddhis tayoh sraguttaṃsavat // 1.3.28 //

tayor ity anibaddham nibaddham<sup>1</sup> ca parāmṛśyate / krameṇa siddhiḥ

kramasiddhiḥ / anibaddhasiddhau nibaddhasiddhaiḥ<sup>2</sup> sraguttaṃsavat / yathā

sraji mālāyām siddhāyām uttaṃsaḥ śekharaḥ sidhyatīti<sup>3</sup> /

[1. om. Kha. 2. nibaddhasiddhiḥ B. 3. sidhyati B.]

kecid anibaddha eva paryavasitās<sup>1</sup> tad dūṣaṇārtham<sup>1</sup> āha —  
nānibaddham cakāsty ekatejaḥ paramāṇuvat // 1.3.29 //

na khalv anibaddham kāvyam cakāsti dīpyate / yathaikatejaḥ paramāṇur iti<sup>2</sup> /  
atra ślokaḥ —

asaṃkalitarūpāṇām kāvyānām nāsti cārūtā /

na pratyekaṃ prakāśante taijasāḥ paramāṇavaḥ //

[1. sragdūṣaṇārtham Kha. 2. iveti Kha.]

saṃdarbheṣu daśarūpakaṃ śreyah // 1.3.30 //

saṃdarbheṣu prabandheṣu daśarūpakaṃ nāṭakādi śreyah /  
kasmāt /<sup>1</sup> tad āha<sup>1</sup> —

<sup>2</sup> tad dhi citraṃ<sup>2</sup> citrapaṭavad viśeṣasākalyāt // 1.3.31 //

tad daśarūpakaṃ hi yasmāt citraṃ citrapaṭavat / viśeṣāṇām sākalyāt /

[1. om. Ka. 2. tad vicitraṃ Kha.]

tato 'nyabhedakṣiptiḥ // 1.3.32 //

tato daśarūpakād anyeṣāṃ bhedānām kṣiptiḥ kalpanam iti / daśarūpakasyaiva<sup>1</sup>  
hīdaṃ sarvaṃ vilasitam / <sup>2</sup> yac ca<sup>2</sup> kathākhyāyike mahākāvyaṃ iti /  
tallakṣaṇam ca<sup>3</sup> nātīva hṛdayaṃgamam ity upekṣitam asmābhiḥ / <sup>4</sup> tadanyato  
grāhyam<sup>4</sup> /

[1. daśarūpakam eva Ka. 2. yad uta BKa. 3. om. Ka. 4. tad anyad ūhyam Kha.]

iti kāvyāḷamkārasūtravṛttau śārīre prathame 'dhikaraṇe tṛtīyo 'dhyāyaḥ /

<sup>1</sup> kāvyāṅgāni kāvyaviśeṣās ca<sup>1</sup> /

samāptaṃ cedaṃ śārīraṃ prathamam adhikaraṇam /

[1. om. BKa.]

## 訳 註

最高の学匠・聖ヴァーマナによって書かれた  
『詩の修辞法の手引』  
註付き。

## 「身体について」と称する第1章

## 第1課

最上の光輝に敬礼してから、ヴァーマナによって、自身の『詩の修辞法の手引』についての詩人たちが好む註釈が執筆された。

1. 1. 1 *kāvyaṃ grāhyam alaṃkārāt.*

(詩は、<sup>かざり</sup>修辞法により [人々に] 受け入れられる。)

じつに、*kāvya-*は *alaṃkārāt* (修辞法により)、*grāhya-*=受け入れられるものとなる。この *kāvya-*という語は、[文体の] 美徳と修辞法によって洗練された、語と事義において存在するものである。しかしながら、語と事義のみの陳述は、ここにおいて、装飾によって受け入れられるのである。

ここで、何が修辞法かを述べる。

1. 1. 2 *saundaryam alaṃkārah.*

(美しさが<sup>かざり</sup>修辞法である。)

飾りが *alaṃkāra-*である。さらに、この *alaṃkāra-*という語は、手段の語源により、直喩等の意味で存在する。

1. 1. 3 *sa doṣaḡuṇālaṃkārahānādānābhyām.*

(それは、欠陥の除去と美徳という<sup>かざり</sup>修辞法を身に付けることによる。)

じつに *sa* とは、修辞法であり、詩人にとって [それは] *doṣa-*を *hāna-*することにより、また *guṇa-*という *alaṃkāra-*を *ādāna-*することにより、実現されるものである。

#### 1. 1. 4 śāstratas te.

(その2つは、教典により [学ぶことができる]。)

te とは、欠陥の除去と美德たる修辭法を身に付けることである。この教典により。なぜなら、śāstratas (教典により)、欠陥を知って除去することができ、美德たる修辭法を身に付けることができるからである。

さらに、修辭法を伴う詩によって、いかなる結果が得られるか？ なぜならば、このようにこの目標があるから、ということ述べる。

#### 1. 1. 5 kāvyam sad dr̥ṣṭādr̥ṣṭārtham, pṛītikīrtihetuvāt.

(良き詩は、目に見える目標と目に見えない目標を達成する——  
歎喜と名声の原因であることから。)

kāvyaṃ sat とは、目に見える目的を達成する望ましいものである——  
pṛītihetuvāt (歎喜の原因であることから)。目に見えない目的を達成する——  
kīrtihetuvāt (名声の原因であることから)。これに関して諸々の詩節が  
[存在する。]

「詩作の確立は、名声への道であると、[人々は] 知っている。他方、このように悪い詩人の方法を真似することは、不評に至る [道であると知っている]。

賢者たちは、[詩作の確立には] 名声と天界という果報が、輪廻が続くかぎり伴うものであると述べている。他方、不評が、光のない奈落<sup>ナラカ</sup>という場所に [導く] 女術<sup>ぜげん</sup>である [と述べている]。

それゆえに、名声を得るために、また不評を避けるために、『詩の修辭法』という教典の事義が、詩人中の雄牛たる人々によって喜ばれるべきである。」

以上が、『詩の修辭法の手引』の註釈における、身体について述べた第1章の第1課である。[執筆] 意図の提示 [が本課の主題である]。

## 第2課

[詩を学ぶ] 有資格者の定義の事義を述べる。

#### 1. 2. 1 arocakinaḥ satṛṇābhyavahāriṇāś ca kavayaḥ.

(詩人たちは、食にこだわる人々<sup>6</sup>と見境なく食べる人々<sup>7</sup>である。)<sup>8</sup>

ここでは、周知のように一対の詩人たちが共存している——食にこだわる人々と見境なく食べる人々とである。arocakin-と satṛṇābhyavahāriṇ- という両語は、美德に関わる事義をもっている。いかなる事義であろうかという、判断力を有することと、判断力をもたないことである。

これについて述べる——

### 1. 2. 2 pūrve śiṣyāḥ, vivekitvāt.

(前者は教えられるべき人々である、判断力を有することから。)

周知のように pūrve (前者が) = 食にこだわる人々が、śiṣyāḥ = 教えられるべき人々である。vivekitvāt = 判断を習慣としていることから。

### 1. 2. 3 netare, tadviparyayāt.

(後者はその反対であるから、[教えられるべき人々では] ない。)

itare = 見境なく食べる人々は、教えられるべき人々ではない。tadviparyayāt = 判断しないことを習慣としていることから。そして、[その] 習慣を捨てることができないのである。

そもそも、教典はこのように全ての人を喜ばせるものとはならないのではないか。それが誰に受け入れられるか。それを述べる。

### 1. 2. 4 na śāstram adravyeṣu arthavat.

(教典は、教示のいなき人々に対しては、有益ではない。)

周知のように、śāstra-は、adravyeṣu = 判断力をもたない人々に対して

<sup>6</sup> arocakin-の字義は、「食欲に従うことのない者、がつつがつしていない者」である。[上村勝彦 2000b] は、この語を「食通」と訳す。

<sup>7</sup> satṛṇābhyavahāriṇ-の字義は、[上村勝彦 2000b] が正しく訳している(「草まで食べてしまう者」)ように、「草まで食べることを習慣とする者」という意味である。上村博士は「大食漢」と訳している。

<sup>8</sup> Kāvya-mīmāṃsā Ch. 4 (p.14): “te ca dvidhā: arocakinaḥ satṛṇābhyavahāriṇaś ca” iti maṅgalaḥ. “kavayo ’pi bhavati” iti vāmanīyāḥ. 『『また、それら(=詩の鑑賞者)は、2種類である。食にこだわる人々と見境なく食べる人々である。』とマンガラは言う。ヴァーマナの信奉者たちは、『詩人も[そう]である。』と言う。』

この Rājaśekhara の見解に従えば、arocakin-と satṛṇābhyavahāriṇ-という区別は、Maṅgala に由来することになる。

は、na<sub>2</sub>arthavat (有益ではない)。

実例を述べる。

#### 1. 2. 5 na katakaṃ paṅkprasādanāya.

(カタカの実は、泥を清めるのには役立たない。)

じつに kataka-は、水に対して [有効である] ようには、na paṅka-prasādanāya (泥を清めるには役立たない)。

[詩を学ぶ] 有資格者を定義したのち、文体決定の事義を述べる。

#### 1. 2. 6 rītir ātmā kāvyasya.

(文体は詩にとっての<sup>リーティ</sup>靈魂<sup>アートマン</sup>である。)

この rīti-と名づけるものは、kāvyā-にとっての ātman-である。「あたかも身体にとって (śarīrasyeva)」を文の残余として [補うべきである。]

さらに、何がこの文体であるかを述べる。

#### 1. 2. 7 viśiṣṭā padaracanā rītiḥ.

(傑出した語の配置が文体である。)

諸々の pada-の特性に満ちあふれる racanā-が rīti-である。

何がこの特性であるかを述べる。

#### 1. 2. 8 viśeṣo guṇātmā.

(美德を本性とするものが特性である。)

述べられつつある guṇa-の美しさが、viśeṣa-である。

#### 1. 2. 9 sā tridhā — vaidarbhī gauḍīyā pāñcālī ceti.

(それは、ヴィダルバ体、ガウダ体、パーンチャーラ体という  
3種である。)

sā=この文体とは、tredhā (3種)に分類される。vaidarbhī gauḍīyā pāñcālī  
である。

さらに、土地の影響により物産の [特性がある] ように、詩の美德の  
発生があるのか? なぜなら、これは土地の特性を示す名称であるから  
である、[たとえば、] そうではないということ述べる。

#### 1. 2. 10 vidarbhāḍiṣu dṛṣṭatvāt tatsamākhyā.

(ヴィダルバ [地方] 等において見られることから、それと同じ

名称をもつのである。)

ヴィダルバ、ガウダ、パーンチャーラ地方において、その地方出身の詩人たちによって、自己の資質に従って〔文体が〕獲得されているのであるから、土地と同じ名称をもつのである。さらには、土地によって詩に対して何らかの〔特性〕が付与されるわけではない。

それら (= 文体) の美德の相違から〔生じる〕相違を述べる。

### 1. 2. 11 samagraguṇopetā vaidarbhī.

(全ての美德を備えたものがヴィダルバ体である。)

samagra- = <sup>オージャス</sup>力感や<sup>ブラサーダ</sup>明解性を始めとする、諸々の guṇa- を upeta- したのが、vaidarbhī- という名の文体である<sup>9</sup>。

これに関して2つの詩節がある。

「わずかな欠陥も付着せず、全ての美德が編まれた、音色のめでたさをもつヴィーナーがヴィダルヴァ体として好まれる。」

この〔文体〕をこのように詩人たちは賞賛する。

「語り手が存在し、事義が存在し、<sup>ことば</sup>音声に関する教説が存在したとしても<sup>10</sup>、それなしでは言葉の蜜は流れないところのもの<sup>11</sup>が存在する。」

これに関する実例 (『シャクンタラー姫物語』 2. 6) :

*gāhantām mahiṣā nipānasalilam śṛṅgair muhus tāḍitam,  
chāyābaddhakadambakaṃ mṛgākulaṃ romantham abhyasyatu.  
visrabdham kurutām varāhavitatir mustākṣatim palvale,*

<sup>9</sup> Cf. Kāvyaḍarśa 1. 42-43 に説かれるヴィダルバ体の10の美德を踏まえた発言である。残りの8つは以下の通り: śleṣa- (緊密性), samatā- (均一性), mādhyurya- (甘美性), sukumārātā- (優美性), arthavyakti- (意味の明白性), udāratva- (卓越性), kānti- (愛好性), samādhi- (転移)。これに対し、Bhāmaha は、ヴィダルバ体やガウダ体というように、文体を区別することに意味はないとする立場に立つ: Kāvyaḷamkāra 1. 31-35 参照。

<sup>10</sup> Kāvyaṃimāṃsā Ch. 5 (p.20) では、sati śabdānuśāsane に代えて、śabde sati rase sati とする (「…、音声 (ことば) が存在し、情緒 (ラサ) が存在したとしても…」)。

<sup>11</sup> [上村勝彦 2000b] によれば、Kāvyaṃimāṃsā のコンテキストでは、「i. e. vākya-pāka」を指すという。śabda-pāka- (音声 (ことば) の成熟) については、KASV. 1. 3. 15 を参照。

*viśrāntiṃ labhatām idaṃ ca śīthilajyābandham asmaddhanuḥ.*

「水牛をして、くりかえし角によって叩いた水たまりに潜らせるべし。  
木陰で集団を作る鹿の群れをして、反芻をくりかえさせるべし。  
野猪の列をして、ためらいなしに沼でムスタ草を掘らせるべし。  
われわれのこの弓をして、弓弦の結びをゆるめた休息を獲得させるべし。」

### 1. 2. 12 ojaḥkāntimatī gauḍīyā.

(力感と愛好性に満ちあふれるものがガウダ体である。)

ojas-と kānti-の両者が存在するというのが、ojaḥkāntimatī gauḍīyā という名の文体である。甘美性と優美性の両者を欠くことから、複合語が多く、非常に力強い語をもつ〔文体〕である。これに関する詩節がある。「文体に長けた人々は、〔長い〕複合語をもち、非常に荘厳な語をもち、力感と愛好性という美德を伴う文体をガウダ体であると説く。」

実例 (『偉大な英雄の業績』 1. 54) :

*doraṇḍāñcitacandraśekharadhanurdaṇḍāvabhaṅgodyata-  
ṣṭaṅkāradhvanir āryabālacaritaprastāvanāḍiṇḍimaḥ,  
drākparvastakapālasaṃpuṭamitabrahmāṇḍabhāṇḍodara-  
bhrāmyatpiṇḍitacaṇḍimā katham aho nādyāpi viśrāmyati.*

「同胞の若者の殊勲を讃えるラッパ〔の音〕である、前腕によって弧を描かれたシヴァ神の弓の棒の破壊から生じた、突如広がった破片の半球によって作られた梵の卵 (= 宇宙) の壺の内部に反響し強められた激しさをもつブローンという音響は、おお、どうして今でも止まないものであろうか?」

### 1. 2. 13 mādhyasaukumāryopapannā pāñcālī.

(甘美性と優美性を備えたものがパーンチャーラ体である。)

mādhyasaukumārya-という美德を upapanna-(備えたもの)が pāñcālī-という名の文体である。力感と愛好性がなく、力強い語がなく、生気のない〔文体〕である。

また、同様に〔これに関する〕詩節がある。

「他方、緩い情意をまとい、古譚の風合を伴う、甘美で、優美な〔文体〕をパーンチャーラ体であると詩人たちは知る。」

これに関する実例(『アマルシャタカ』 v. 131) :

*grāme 'smin pathikāya pāntha vasatir naivādhunā dīyate  
rātrāv atra vihāramaṇḍapatale pānthaḥ prasupto yuvā,  
tenothāya khalena garjati ghane smṛtvā priyāṃ tat kṛtaṃ  
yenādyāpi karaṅkadaṇḍapatanāśaṅkī janas tiṣṭhati.*

『旅人よ、この村では、今、旅人のための宿は用意されていません。』

[それを聞いた] 若い旅人は、この僧院の祠の屋根で一晩寝ました。

[そして]雲が雷鳴を放っている時、その悪漢は起き上がって、恋人を想い出し、それをなした。

それゆえに、今でも、人は [祠では] 骸骨の杖が落ちる<sup>12</sup>ことを恐れてじっとするのである。」

あたかも下書の上の絵のように、これら3つの文体の上で詩は安立する。

#### 1. 2. 14 tāsām pūrvā grāhyā, guṇasākalyāt.

(それらのうち、最初の [ヴィダルバ体] を採用すべきである  
— [諸々の] 美徳を完備しているがゆえに。)

tāsām = 3つの文体のうち、pūrvā = ヴィダルバ体を grāhyā (採用すべきである) — 諸々の美徳を完備しているがゆえに。

#### 1. 2. 15 na punar itare, stokaguṇatvāt.

(また、[ガウダ体とパーンチャーラ体の] いずれも [採用すべきでは] ない—美徳が少ないがゆえに。)

itare = ガウダ体とパーンチャーラ体の両者は採用すべきで na (ない) — stokaguṇatvāt (美徳が少ないがゆえに)。

#### 1. 2. 16 tadārohaṇārtham itarābhyāsa ity eke.

(ある者たちは、それ (ヴィダルバ体) に上達するために、いずれも練習すべきである、と [考えている]。)

tasya = まさにヴィダルバ体に、ārohaṇārtham (上達するために)、itara-

<sup>12</sup> 「骸骨の杖が落ちる」とは「バチが当たる」という意味であろうか。

＝兩文体の *abhyāsa-* (練習) も [あるべきである] と, *eke* (ある者たちは) 考えている。

1. 2. 17 *tat tu na; atattvaśīlasya tattvāniṣpatteḥ.*

(しかしながら, それは [正しく] ない—真実ならざるものを習慣としているものにとって, 真実 (=正しい詩) の完成はないから。)

なぜなら, *atattva-*を習慣としている人に, *tattva-*が *niṣṣṛpad-* (完成) されることはないから。

例示のために述べる。

1. 2. 18 *na śaṅasūtravānābhyāse trasarasūtravānavaicitryalābhaḥ.*

(麻糸織りをくり返しても, 梭糸織り<sup>13</sup>による華麗さが得られることはない。)

なぜなら, *śaṅasūtravāna-*を *abhyās-* (くり返) している織工が, *trasarasūtravānavaicitrya-*を *√labh-* (得る) ことはないから。

1. 2. 19 *sāpi samāsābhāve śuddhavidarbhī.*

(また, 複合語のない場合, それは純粋なヴィダルバ体である。)

もしも複合した語が存在しないならば, *sāpi* (また, その) =ヴィダルバ体は *śuddhavidarbhī-* と呼ばれる。

1. 2. 20 *tasyām arthaguṇasampad āsvādya.*

(そこにおいては, 事義の美德の完備を味わい得る。)

*tasyām* =ヴィダルバ体においては, *arthaguṇasampad āsvādya* (事義の美德の完備を味わい得る)。

1. 2. 21 *tadupārohād arthaguṇaleśo 'pi.*

(それに熟達することにより, [読者は] 事義の美德の細部も [味わい得る]。)

実際, その適用により, *arthaguṇaleśo 'pi* (事義の美德の細部も) 味わ

---

<sup>13</sup> *trasarasūtravāna-*: [機織の] 梭を使って糸で布を織ること. 異読 (*trasaratantu-BKa*) によれば, 「梭 [で織られた] 織維の」という訳になる。

い [得るのである]。また、事義の美德の完備については言うまでもない。また、同様に人々は言う。

「しかし何かがあるのか [たとえば]、何かがある [別のもの] のように見えるわけではないが、比類なき語の順序をもつ、ある [文体が存在するのである]。

そして、[それは] 善き人々の外耳道<sup>がいじどう</sup>を前進して [かれらの] 心に入っ  
て喜ばせる——甘露の雨のように。

真実ならざるものも真実の状態に到達するところの、語の輝きは、こ  
とばに依拠して滴る。なぜなら、そのようなものは、どれほど単純なも  
のであっても、どのヴィダルバ体においても、[詩の] 心をもつ人々の  
心を喜ばせ、高揚させるからである。」

### 1. 2. 22 sāpi vaidarbhī, tātsthyāt.

(それもヴィダルバ体である——そこ (=ヴィダルバ体) にあるこ  
とから。)

sāpi=この事義の美德の完備も vaidarbhī-と呼ばれる。tātsthyāt とは、  
間接表現<sup>ウバチャーラ</sup>による慣用を示している。

以上が、『詩の修辞法の手引・註』における、身体について述べた第  
1章の第2課である。有資格者の考察と文体決定とが [本課の主題であ  
る]。

## 第3課

文体の真実を定義したのち、詩の体肢を示すために述べる。

### 1. 3. 1 loko vidyā prakīrṇaṃ ca kāvyāṅgāni.

(常識と学問と雑多なことが詩の体肢である。)

列挙の順に従って、次のように説明する。

### 1. 3. 2 lokavṛttaṃ lokaḥ.

(世間の出来事が常識である。)

loka-=不動と動を本質とするもの。その成行きが vṛtta-である、と  
[述べているのである]。

### 1. 3. 3 śabdasmṛtyabhidhānakoṣacchandovicitikalākāmasāstradaṇḍa-nītipūrvā vidyā.

(言語に関する伝承, 語彙辞典, 韻文探求, 芸術, 愛欲教典, 政策学を前提とするものが学問である。)

śabdasmṛti-等のものを前提とする, というのがpūrvā-である。作詩において必要とされるからである。

それらを詩の体肢として適用することを述べる。

### 1. 3. 4 śabdasmṛteḥ śabdaśuddhiḥ.

(言語に関する伝承により, 言語の正規化が [生じる]。)

śabdasmṛteḥ = 文法により, śabda-の śuddhi- = 正規形の決定がなされるべきである。じつに, 正規の単語は, 憂慮することのない詩人たちによって用いられているからである。

### 1. 3. 5 abhidhānakoṣāt padārthanīścayaḥ.

(語彙辞典により, 語の事義の決定が [生じる]。)

じつに, 配列における用法の適切な語に情意を込めながらも, 事義に疑念のあることによって, 用いるべきではない, あるいは捨てるべきではない, というのが作詩における障害である。それゆえに abhidhānakoṣa-により padārthanīścaya-をなすべきである, と [手引にいう]。

他方, [読者が] 先例のない語彙を得たことにより事義をもつことは, 語彙辞典に関する矛盾である—用いられたことのない [語彙] を用いるべきではないからである。もしも用いられたことのある [語彙] が用いられたならば, そのとき単語に関して「何?」という事義に疑念のあることを憂慮することがあろうか。それはない。その際には, 普遍によって事義の理解が生じるのである。

例えば, 「帯 (nīvī-) という音声<sup>ことば</sup>によって, 腰布の結び目が述べられる」<sup>14</sup> という [定義により], 何についての [単語かという] 決定がある。

<sup>14</sup> nīvīśabdena jaghanavastragranthir ucyate: 典拠不明. Cf. Amarakośa 3. 3. 311: strīkaṭīvastrabandhe 'pi nīvī paripaṇe 'pi ca.; Vaijayanīkośa 4. 3. 130: vastragrantho strī nīvir uccayaḥ.; Medhinīkośa 19. 15: nīvī paripaṇe strīṇaṃ kaṭīvasanabandhane.

「女性のか男性のか」という疑念は、「nīvī-とは、女性の腰に位置する衣を結ぶものである」<sup>15</sup>という名詞辞典の[nīvī-の項の]冒頭句が見られることにより、[解消される]。

次にどのように「使われるかといえば、」

*kenacit pūrvamukto 'pi nīvībandhaḥ ślathīkṛtaḥ,  
vicitrabhojanābhogavardhamānodārāsthībhīḥ.*<sup>16</sup>

「ある男によって以前に解かれて、帯の結び目がゆるんでいるのに、『いろんな料理を食べて腰骨が広がったので…』と「女は言い訳をする。』」

というような、誤解もしくは間接表現による使用<sup>17</sup>がある。

### 1. 3. 6 chandoviciter vṛttasamśayacchedaḥ.

(韻文探求により、韻律に関する疑念の除滅が[生じる]。)

詩の反復により、vṛtta- (韻律) の転移がまさに生じる<sup>18</sup>のである。にもかからわず、音量律と韻律等に関して、何らかの疑念が生じるであろう。この故に、chandoviciter (韻文探求により) vṛttasamśayacchedaḥ (韻律に関する疑念の除滅が) なされるべきである、と[述べているのである]。

### 1. 3. 7 kalāsāstrebyaḥ kalātattvasya samvit.

(芸術教典により、芸術の真実に関する理解が[生じる]。)

kalā- (芸術) とは歌謡・舞踊・絵画等である。それらについて述べている śāstra- (教典) が、ヴィンチャーキラ<sup>19</sup>等によって説かれた kalāsāstra-

<sup>15</sup> nīvī samgrathanam nāryā jaghanasthasya vāsasaḥ: 典拠不明。

<sup>16</sup> 異読 (BJhā) では、ab pāda と cd pāda が入れ替っている。

<sup>17</sup> この例文では、下半身にまつわる下品な語を避けて、「帯の結び目 (nīvībandha-)」という上品な表現を用いたものと考えられる。そのような用例は、仏教の律文献にも見られる (例えば、大衆部説出世部に属する Abhisamācārika-Dharma では、排泄行為や放屁行為を「威儀を正す (samudācāra-kṛ-)」と表現している。[古宇田亮修 2003] 参照)。そのような表現を使う場合に、語源上の意味が完全に忘れられている (例えば、samudācāra-kṛ-の字義を「排泄行為をなす」と理解している) ならば、それは〈誤解による使用〉であるが、意図して暗示的に用いているならば、それは〈間接表現による使用〉である。

<sup>18</sup> ここでは、「学習者の中に韻律のイメージが焼きつく」という意味で「転移 (samkrānti-)」という語が用いられている。

<sup>19</sup> Viśākhila-は、音楽学の学匠の名であるが、その著作は現存していない。

である。それらにより、kalātattvasya (芸術の真実に関する) saṃvid=理解が [生じるのである]。じつに、芸術の真実に関して無理解である場合、芸術の粹すいを正確に著すことがけっしてできないから [詩人も芸術教典を学ぶべきなの] である。

### 1. 3. 8 kāmāśāstrataḥ kāmopacārasya.

(愛欲教典により、愛欲の作法に関する [理解が生じる]。)

saṃvit 「理解が [生じる]」と続くのである。kāmopacārasya (愛欲の作法に関する) 理解が、kāmāśāstrataḥ (愛欲教典により) [生じる] と [述べているのである]。じつに、詩の主題は愛欲の作法に満ちているから [詩人も愛欲教典を学ぶべきなの] である。

### 1. 3. 9 daṇḍanīter nayāpanayayoḥ.

(政策学により、正しい行動と誤った行動に関する [理解が生じる]。)

daṇḍanīter=実利教典により、naya- (正しい行動) と apanaya- (誤った行動) に関する理解が [生じる] と [述べているのである]。その場合、[王の採るべき] 六計<sup>20</sup>の正しい実践が naya-である。その反対が apanaya-である。じつに、その双方を理解せずに、英雄と怨敵ライヴァルに関する出来事を詩に著すことができないからである、と [述べているのである]。

### 1. 3. 10 itivṛttakuṭilatvaṃ ca tataḥ.

(また、出来事の紆余曲折が、それから [生じる]。)

itivṛtta=イティバース史談等は詩の骨格である。そのの kuṭilatvaṃ (紆余曲折が)、tataḥ=政策学から、すなわち「優勢な王の行動」・「劣勢な王の行動」<sup>21</sup>等の実践がそこから引き出される根となることからである。同様に、他の

---

[Ramanathan 2008] によれば、その名が言及されている書物として、9世紀以前ののものに限っても、本書の他に、Datilam, Ṭhānaṅga-sutta, Kuṭṭanīmata, Bṛhaddeśīが挙げられるという。

<sup>20</sup> śāḍgunya- (六計) とは、Kauṭīliyāthasāstra 7. 1. 2 によると、和平 (saṃdhi-)、戦争 (vighraha-)、静止 (āsana-)、進軍 (yāna-)、依投 (saṃśraya-)、二重政策 (dvaidhībhāva-) という王の採るべき6つの政策である (訳語は [上村勝彦 1984] に従う)。

<sup>21</sup> ābalīyasa-. Cf. Kauṭīliyāthasāstra 7. 3. 6, 35; 7. 14. 28.

学問に関しても、それぞれ適用が説明されるべきである、と [述べているのである]。

1. 3. 11 lakṣyajñātvam abhiyogo vṛddhasevāvekṣaṇaṃ pratibhānam avadhānaṃ ca prakīrṇam.

(特徴を知ること、専念、先達に仕えること、検討、直感力、集中、[これら]が、雑多なことである。

1. 3. 12 tatra kāvyapariçayo lakṣyajñātvam.

(その内、特徴を知ることとは、詩の研究である。)

他の諸々の kāvya- (詩) に対する pariçaya- (研究) が lakṣyajñātva- である。じつに、それにより詩作の通達が生じるから [それが必要なのである]。

1. 3. 13 kāvyabandhodyamo 'bhiyogaḥ.

(専念とは、詩作に精励することである。)

詩を√bandh-すること＝執筆が kāvyabandha- である。それに udyama- (精励すること) が abhiyoga- (専念) である。じつに、彼は [それにより] 詩人としての上達を得るから [それが必要なのである]。

1. 3. 14 kāvyopadeśaguruśūśrūṣaṇaṃ vṛddhasevā.

(詩を教える師匠に仕えることが、先達に仕えることである。)

kāvyopadeśe (詩を教える上での) guru- (師匠) たちが教師たちである。かれらに、śūśrūṣaṇaṃ (仕えること) が vṛddhasevā (先達に仕えること) である。それにより、詩の学問に関する相承が生じるのである。

1. 3. 15 padādhānoddharaṇam avekṣaṇam.

(語の挿入や除去が検討である。)

pada- (語) の ādhāna- (挿入) とは追加である。uddharaṇa- (除去) とは消去である。周知のように、それら2つについて avekṣaṇam (検討) がある。これに関して、2つの詩がある。

「心が揺れる分だけ、挿入<sup>22</sup>と除去がある。おお、語に関する安定性が

<sup>22</sup> Kāvyaṃimāṃsā Ch. 5(p.20)では、ādhāna-に代えて āvāpa-とするが、意味は同じ

確立されたとき、<sup>サラスヴァティー</sup>弁舌<sup>23</sup>が成就する。」

「諸々の語は、交換可能な状態をまさに捨て去るが、<sup>ことば</sup>音声の追加に長けた人々は、そのことを<sup>ことば</sup>音声の熟成と呼んでいる。」

### 1. 3. 16 kavivabjāṃ pratibhānam.

(詩人としての種子が直感力である。)

kavitva- (詩人であること) の bīja- (種子) が、kavitvabīja- である。[それは] 別の生に由来する、ある特別な<sup>カンスカーラ</sup>潜勢力である。なぜならば、それなしに詩は生成しないからである。そうでなければ<sup>24</sup>、生成された [詩] は、嘲笑の拠り所となるであろう。

### 1. 3. 17 cittaikāgryam avadhānam.

(心を一点に置くことが集中である。)

cittasya (心の) ekāgrya- (置くこと) = それ以外の<sup>もの</sup>事義の消滅が avadhāna- (集中) である。じつに、集中した心が諸々の<sup>もの</sup>事義を見るからである<sup>25</sup>。

### 1. 3. 18 tad deśakālābhyām.

(それは、場所や時により [生じる。])

tad- (それ) = 集中は、deśa- (場所) により、また kāla- (時) により、生じる。

さらに、場所と時とは何かを述べる。

### 1. 3. 19 vivikto deśaḥ.

([世俗と] 隔絶したところが「場所」である。)

vivikta- (隔絶したところ) とは人のいない場所である。

### 1. 3. 20 rātriyāmas turīyaḥ kālaḥ.

---

である。

<sup>23</sup> Kāvyaṃīmāṃsā Ch. 3 によると、Sarasvatī は Kāvyaṃpuruṣa の母とされる。

<sup>24</sup> 「種子をもたない人が詩作をなすならば」の意。

<sup>25</sup> Cf. Kāvyaṃīmāṃsā Ch. 4 (p.11): “kāvyakarmani kaveḥ samādhiḥ paraṃ vyāpriyate” iti śyāmadevaḥ. manasa ekāgratā samādhiḥ. samāhitam cittam arthān paśyati. 『詩の創作においては、詩人にとって精神統一が最も大きな役割を果たす』とシヤーマデーヴァは言う。心を一点に置くことが精神統一である。統一された心が諸々の事義を見るのである。」

(夜の更の4番目が「時」である。)

rātri- (夜) の yāma- (更) が rātriyāma- = プラハラ<sup>26</sup>である。turīya- = 4番目の「更」が時である、と「述べている」。それにより、感覚の対象が消えた清らかな心が集中するのである。

同様に、詩の体肢を教示してから、詩の特性<sup>27</sup>を語るために述べる。

### 1. 3. 21 kāvyam gadyam padyam ca.

(詩には、散文と韻文がある。)

gadya- (散文) について先に説かれているのは、「詩として」定義することが極めて難しいことにより、作り難いことからである——「人々は、散文を詩人にとっての試金石と言う」と人々が言うように。

また、それは3種に分類されることを示すために述べる。

### 1. 3. 22 gadyam vṛttagandhi cūrṇam utkalikāprāyam ca.

(散文には、韻律の香りをもつもの、<sup>パウダー</sup>抹香、華美を専らとするものがある。)

その定義を述べる。

### 1. 3. 23 padyabhāgavad vṛttagandhi.

(韻文を一部にもつものが「韻律の香りをもつもの」である。)

padya- (韻文) の bhāga- (一部) が、padyabhāga- である。それをもつものが、vṛttagandhi- (韻律の香りをもつもの) である。例えば、“pātālatālu-talavāsiṣu dānaveṣu” (---|---|---|---|---) (<sup>バターラ</sup>地獄の最下部に住む<sup>ダーナヴェ</sup>悪魔たちにおいて) である。じつに、この「表現」においては Vasantatilakā という名の韻律(---|---|---|---|---)の部分が認識される<sup>28</sup>。

### 1. 3. 24 anāviddhalalitapadam cūrṇam.

(長く複合することなく好ましい語を含むものが、<sup>パウダー</sup>「抹香」である。)

anāviddha- (長く複合することなく) = 長い複合語をもたず、lalita- (好ましい) = 過剰でない pada- (語) を含むものが、anāviddhalalitapadam

<sup>26</sup> prahara- と yāma- は、夜の3時間を指す同義語である。

<sup>27</sup> 「詩の特性」と訳した kāvyaviśeṣa- は「勝れた詩」とも訳し得る複合語である。

<sup>28</sup> すなわち、最後の1音節のみ、異なっている。

cūrṇam (抹香である) と [述べているのである]。例えば、次のように。  
 “*abhyāso hi karmaṇām kauśalam āvahati, na hi sakṛnnipātāmātreṇodavindur  
 api grāvaṇi nimnatām ādadhāti*”

「じつに反復は、行為の熟練をもたらす。たとえ水滴であっても、一回落ちるだけでは、石に凹みを作ることはけっしてないのであるから。」

### 1. 3. 25 viparītam utkalikāprāyam.

([その] 反対が「華美を専らとするもの」である。)

viparīta- ([その] 反対) = 長く複合し、過剰な語をもつものが、  
 utkalikāprāyam (華美を専らとするもの) である。例えば、次のように (『ハ  
 ルシャ王の業績』<sup>チャリタ</sup> 6章, p. 95)。

“*kuliśaśikharakharanakharapraçaṇḍacapetāpāṭitamattamātaṅgakumbha-  
 sthalagalanmadacchaṭāccharitacārukesarabhārabhāsurasamukhe kesariṇi*”

「[インドラの] 斧 (= 雷電) の先端のような鋭い爪による激しい打撃によって  
 倒された発情した象の額の隆起した場所から流れ出るマダ液の奔流によって塗  
 られた優美な<sup>たてがみ</sup>鬣の豊かさによって輝く顔をもつライオンにおいて…」。

### 1. 3. 26 padyam anekabhedam.

(韻文は、多種である。)

padya- (韻文) は、周知のように、正規の<sup>サ</sup> [韻文]、半分正規の<sup>アルダ</sup> [韻文]、  
<sup>ヴィ</sup>非正規な<sup>シヨ</sup> [韻文] 等の bheda- (種類) を備えている。

### 1. 3. 27 tad anibaddhaṃ nibaddhaṃ ca.

(それには、枠づけられていないものと枠づけられたものがある<sup>29</sup>。)

tad = この散文と韻文から成る詩には、anibaddhaṃ nibaddhaṃ ca (枠づ  
 けられていないものと枠づけられたものの両者がある)。両者については、よ  
 く知られているので、定義を述べていない。

### 1. 3. 28 kramasiddhis tayoḥ sraguttamsavat.

(両者には、順番による成立がある——花鬘と花冠のように。)

<sup>29</sup> anibaddha-, nibaddha- という両語の意味は難解である。[上村勝彦 1999: 505]  
 は、nibaddha- を「[一貫した筋の作品に] 構成された」と訳す。インド古典音楽  
 においても、この両概念は重要な役割を果たしている。[デーヴァ 1994: 146f]

tayoḥ とは、粋づけられていないものと粋づけられたものが考えられている。順番による成立が、kramasiddhi-である。粋づけられていないものが成立するとき、粋づけられたものの成立と共にある—sraguttamaṣavat (花鬘と花冠のように)<sup>30</sup>。例えば、sraj=花鬘が成立しているときに、uttamaṣa=花冠が成立するのである。

### 1. 3. 29 nānibaddhaṃ cakāsty ekatejaḥparamāṇuvat.

(粋づけられていないものは、輝くことがない—火の一原子のよ  
うに。)

周知のように、anibaddhaṃ (粋づけられていない) 詩は、cakāsti=輝くことがない。例えば、ekatejaḥparamāṇu- (火の一原子) のように、と [述べているのである]。これに関する詩がある。

「美しさが集められていない詩に、魅力は存在しない—火の原子が、個別に輝くことがない [ように]。」

### 1. 3. 30 saṃdarbheṣu daśarūpakam śreyah.

(創作のうち、演劇が最上である。)

saṃdarbheṣu=作品のうち、daśarūpakam=演劇等が、śreyas- (最上である)。

なぜであろうか? それを述べる—

### 1. 3. 31 tad dhi citraṃ citrapaṭavad viśeṣasākalyāt.

(なぜならば、<sup>カラフル</sup>多彩な布のように、[諸々の] 特性を完備している  
ことにより、それは<sup>カラフル</sup>多彩であるから。)

tat=演劇が、hi=なぜならば、citraṃ citrapaṭavat (多彩な布のように、多彩であるから)。諸々の viśeṣa- (特性) を sākalyāt (完備しているから)。

### 1. 3. 32 tato 'nyabhedakṣiptiḥ.

(そこから、別の種類の創作が生み出される。)

tato=演劇から、anyeṣāṃ bhedaṇām (その他の種類の) kṣiptiḥ=創作があ

<sup>30</sup> anibaddhasiddhau nibaddhasiddhaiḥ sraguttamaṣavat. この文章は nominative を欠くため、難解である。Bは、nibaddhasiddhaiḥ に替えて nibaddhasiddhiḥ とする。

る、と [述べている]。じつに、まさに演劇についてのこの一切が戯れ出るのである。また、「説話と物<sup>カター</sup>語<sup>アークヤイカー</sup>の両者が大<sup>マハー</sup>詩<sup>カーヴィヤ</sup>である」という定義はたいして魅力的でないと [考え]、われわれは考慮することがない<sup>31</sup>。それ以外のものについて把握すべきである。

第3課 [了]。

以上、『詩の修辭法の手引・註』における、[詩の] 身体について述べた<sup>32</sup>第1の章が完了した。

---

<sup>31</sup> Daṇḍin の Kāvyaḷarśa 1. 23–28 にも、Kathā と Ākhyāyikā の両者の区別に関する議論が述べられているが、Daṇḍin, Vāmana 共にそれらの区別を重視する立場を批判している。

<sup>32</sup> śārīram. 本章では、主として、(1)文体 (rīti-) という靈魂 (ātman-), (2)体肢 (aṅga-) : 常識・学問・雑多なこと, (3)骨格 (あらすじ) (śarīra-), という3点について述べているので、śārīram という語が章題となっていることは、やや不適切な感が否めない。しかし、章題に含まれる śarīra-は、靈魂と体肢と骨格とを含めた身体全体の意味であると解するならば、この章題も諒解し得よう。Vāmana は、美德 (guṇa-) や修辭法 (aḷamkāra-) を、その身体に着せる服装や装飾と捉えているのであろう。Daṇḍin にも同様の思考法が垣間見える。Cf. Kāvyaḷarśa 1. 10.